

# 明治・大正期 崇仁のまちづくり

## ～あそびにきませ<sup>よも</sup>四方の人～

開催に当たって

本特別展では、2012 年度企画展「営々たる崇仁のまちづくり」の続編として、「明治・大正期 崇仁のまちづくり～あそびにきませ<sup>よも</sup>四方の人～」と題した展示を実施いたします。前回「エリアマネジメント」を取り入れた新しい視点から、崇仁地区を中心とした京都駅東側の将来像について歴史と現在のまちづくりを交差させて考える試みを実施いたしました。本展では、崇仁地区における明治・大正期のまちづくりの先見性と広がりについて紹介いたします。

近代に入ると、鴨川を挟んで存立していた「大仏柳原庄」から、鴨川西側に位置する小規模な自治体「柳原庄村」が誕生し、現在の崇仁地区につながる歴史が始まります。

柳原庄村の役場は、「道正庵」という立派な建物を、明治初年に地元が買い取り、移築したものでした。地元の経済力が、いかに隆盛であったのかがしのべれます。その際に入手した狩野永徳作と伝えられる「雲龍図」は、後に崇仁小学校（市編入に伴い柳原小学校から改称）の「静室」の床の間に掛けられ、静座修行する学童たちをじっと見つめていました。

地元出身であり、第 6 代柳原小学校の校長を務めた玉置嘉之助による「柳原町歌」は、地元の紹介から始まり、名高い地場産業である履物、革細工、花緒向掛、下駄表、雪駄、雪靴、靴鞆、軍用輸出品等の生産が当時として何十万円にも上ったことや、学校、商品館、銀行、倉庫、水車などを建設したことを誇っています。また、勤勉・儉約を励行し、「柳のけふる春の朝、月の冴えたる秋の夜、あそびにきませ<sup>よも</sup>四方の人」と締めくくっています。自分たちのまちを誇るだけでなく、差別の強い中にあっても、周囲の人たちに呼び掛け、開かれたまちを作ろうとした気概がうかがえます。

柳原町歌が示すように、当時の柳原町では、子どもたちのために教育講を設置し、経済振興のために柳原銀行や京都皮革株式会社を設立するなど、まちづくりは活況を呈します。また、1918（大正 7）年、紀伊郡から京都市に編入される際の町村引継文書を読みとくと、地元が中心となり、教育の奨励、産業の振興、道路の開通、河川の修理などの事業を展開していたことが分かります。地域が貧困な状況下にあっても、力ある住民たちが中心となって主体的にまちづくりに取り組み、それが誇りでもあったことが伝わってきます。また、鉄道（京都駅）の敷設や幹線道路の開通（塩小路通・南北通路開削等）に積極的に貢献して、京都駅東側全体をも視野に入れたまちづくりの取組を行ってきたことが分かります。

玉置が「あそびにきませ<sup>よも</sup>四方の人」と謳ったように、崇仁地区に多くの人々や資源を招き入れようとする積極性があったことに学びたいと思います。本展では市民の皆様と共に崇仁地区の歴史を通して、京都のまちづくりのこれからについて考えることができれば幸いです。

最後に本特別展の開催に当たり、資料の提供等に御協力をいただきました皆様に心からお礼申し上げます。